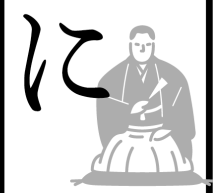
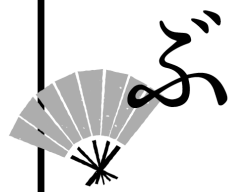


古典落語



学



落語家
立川談四楼

第十回 どうぎ 胴斬り

武 士、鯉、大名、小路、生鯛、茶店、紫、火消し、
錦絵、火事に喧嘩に中っ腹、伊勢屋、稲荷に犬の

糞。

ズラッと並べましたが、これ何だか分かりますか。江戸の名物なんです。一つ一つをちょっと調べると、なるほどなあといいことになります。お暇な折に辞書を引くとか検索してみてください。

トップに武士がいます。侍、士とも書いてサムライです。落語の舞台となる江戸時代、この武士が幅を利かせていました。

「士農工商と言いまして、往来でも道の七分を侍が歩くんです

な。残りの三分を農工商が歩くという。ですから我々落語家は歩くところがない。しょうがないからドロの中を這って歩いたという——。そんなマクラを振ることもあるくらいです。

うっかり文句も言えません。相手は武士の象徴である両刀をたばさんでいるのですから。でも江戸っ子にうっかり者は多いんです。

酒

に酔った町人が侍に喧嘩を吹っかけた。怒った侍は町人の胴を真一文字に斬る。侍は悠然とその場を去るのですが、侍は居合抜きの達人で、町人は斬られたことに気付きません。気が付いたのは上半身が横にズレ、天水桶の上に乗る、

歩けなかったからです。

兄貴分あにきぶんが通りかかり、事情を話して助けてもらい、何とか帰宅することができました。翌日、兄貴分が訪ねると、胴は飯を食い、足はそこらじゅうを駆け回っていて、男は生きています。

よし、ふさわしい仕事を見つけてやろうと、兄貴分は一肌脱ぎます。胴を動かなくていい銭湯の番台勤めに紹介するのです。困ったのは足についてです。兄貴分は閃ひらめきました。蒟蒻屋こんじやくやで蒟蒻玉を踏み続ける仕事です。これが大当たり、脇目も振らずに蒟蒻を踏み続けるからです。胴と足はたちまち評判になりました。見物人まで現れる騒ぎで、何しろ一人で二人前の仕事をするのですから。

し

ばらくして兄貴分が胴を訪ねると、胴はこんなことを言います。「目が霞かすんで仕方がないので、三里さんり（膝の少し下のツボ）に灸きゅうを据すえたい。足に頼んでくれ」と。おいきたと請け合い、兄貴分は足を訪ねる。胴の願いを快く聞き入れた足は、自分も胴に伝言を頼みたいと言います。「湯茶をガブガブ飲まないように言ってくれ。小便が近くていけねえ」

これが『胴斬り』です。落語らしいバカバカしさを備えている噺はなしです。胴と足、つまり上半身と下半身に人格があるところが味わいとなっています。違うところにながら、胴が湯茶

を飲むと、足の小便が近くなる。これが落語なのです。

かなり似た噺はなしに『首提灯くびちようちん』があります。設定が酷似しています。違うのは胴でなく首を斬られるところです。やはり男は斬られたことに気付きません。首が勝手に右を向いたり左を向いたり、あるいは落ちかかってくるのを押さえたりするだけです。

五代目の柳家小やなぎやこさんは剣道の名手でした。「名誉」の付かない本当の七段でしたから、首を斬る一瞬の身のこなしは見事でしたね。イヤツという裂帛れっぽくの気合いととも扇子を横に払うのですが、ああ、これなら首を斬られても気が付かないだろうと思わせるものがありましたね。

噺

に戻ります。男が首が変だぞと思ったところへ火事だ火事だと野次馬が追い抜いて行きます。ジャマだとぶつかるのがあります。遠くに火の手は見えるものの、江戸の町は真っ暗です。足元すらよく見えません。さらに人がぶつかってきます。男はふと思いつき、頭を提灯に見立て、両手でこれを持つと、「ハイごめんよ、ハイごめんよ」。

江戸の夜を思わせるいいサゲですよ。